

五十年前を語れる世代 成田 傑

前号『水源地』創刊号、二〇一六年冬刊)でJ2と記した北海道コンサドーレ札幌はJ1へ。B1のレバンガ北海道は低空飛行ながらB1に居続けている。北海道日本ハムファイターズはといえば……? コロナ禍の中ひっそりと新球場の起工式が四月十三日に行われた。五月一日着工二十二年末に完成して翌年の三月開業の予定となっている。……と書いてはみたがスポーツ観戦はままならぬご時世である。除雪作業から庭の手入れとすることは変わったが、相変わらず家の周りから離れられず仕事に出かける子どもたちの事を心配する日々である。

昨年久しぶりに渡島(おしま)半島を一周した。松前町の白神岬(しらかみみさき)展望広場に立ち寄った。そこで「伊藤整(いとう・せい、一九〇五〜一九六九)生誕の地」の碑があることに気が付いた。小樽市塩谷(しおや)ゴロダの丘にある文学碑には何度か寄ったことがあり、小樽生まれと思いついていたため驚いた。帰宅後『北海道文学地図』を数十年ぶりに開いた。何せ昭和五十四年の本、生誕碑は載っていないかった。改訂版も出版されているが購入していない。

ついでにと伊藤整の『故郷の風物』(一九三六年十月執筆)を拾い読み始めた。この本(上記『北海道文学地図』、文学碑等の略地図のほか北海道・その文学風土として明治後期から昭和三十年代までに発表された二十人の文章が載っている。国木田独歩(一八七二〜一九〇八)・石川啄

木(一八八六〜一九二二)・有島武郎(二八七八〜一九二三)等旅行者もしくは結果的に旅行者となった人々。北海道を離れ北海道を故郷とした人等いろいろである。

その中で気になったのが「祖国愛と郷土愛」昭和十八年・「歴史のない国」昭和十八年・「北海道的劣等感」昭和三十一年と続く標題と「内地」という言葉だ。やはり未開の地、歴史のない地、「異界の地」と捉えられているのではないかと。京の都を中心とした前後(備前・備後、越前・越後)や江戸期の上下(上総・下総)の地図。東西を中心に据え東の奥は陸奥である。北という言葉は出てこない。歴史も明治期になってやっと北海道開拓、屯田兵が出てくる(開拓という言葉も見方を変えれば侵略である)。私の世代でも国語や理科では北海道にはなじみのない動植物があつかわれ釈然としない事が多々あつた。関東、関西に対する違和感である。私の親世代はよく「内地」という言葉を使っていた。満州や樺太から見ての日本本土とは違う「内地」である。同じ日本国内である異境の地、北海道へ渡らなければならなかった人々の望郷の言葉のように思う。今や「死語」化した言葉である。

『水源地』第一号に同じ道産子である杉本佳巳氏が随筆に「内地から来た人は」と、また石川憲生氏の随筆にも「内地の皆さんは知らないと思います」と「内地」という言葉が使われていた。またローカルな本(朝日新聞北海道版に連載)だが『北海道へ』で作家池澤夏樹氏が担当した部分「司馬さんの北海道」(『街道をゆく』について書いている)に

「だから、日本人が内地から北海道へ渡った道に沿って話が広がることになり」とある。まだ私の世代以上の道産子には「内地」という言葉がこびりついているのかもしれない。

北海道百年を基に建設された北海道百年記念塔は北海道命名百五十年の年に老朽化が著しく解体の方針が打ち出されている。結論はまだ出ていない。

『北海道文学地図』 北海道文学館編 北海道新聞社 昭和五十四年二月十五日発行

帯巻の惹句 全国でも類のない異色の文学地図 小説、児童文学、詩、短歌、俳句の分野ごとに、北海道出身・在住作家の代表作をはじめ、北海道を舞台にした作品、足跡を地図別に整理した文学地図のほか、札幌、小樽、函館、旭川、釧路の文学散歩地図を収録。また北海道の文学碑一覧、北海道文学に関わる創作、論考を加えた異色の文学地図

『北海道へ』 朝日新聞社編 朝日新聞社出版 二〇〇八年七月三十日発行 朝日文庫

帯巻の惹句 映画、文学、音楽、教育等と様々なジャンルを通して、北国を、そして、故郷やその人々をいつくしんできた十二人による、北海道への限りなく温かなエール

